本と地域の情報誌

県北 どらくろあ

第102号　2024年9月1日（毎月1日発行）

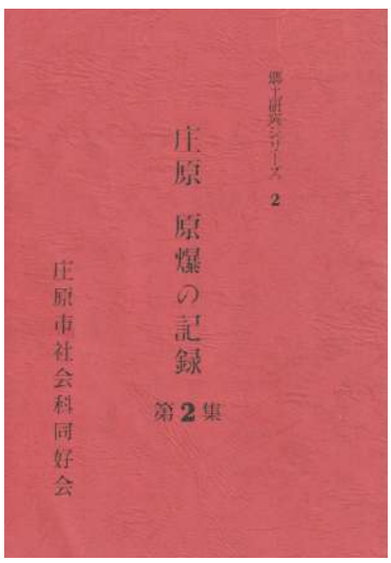
郷土の本棚⑱（文責・赤川仁洋）

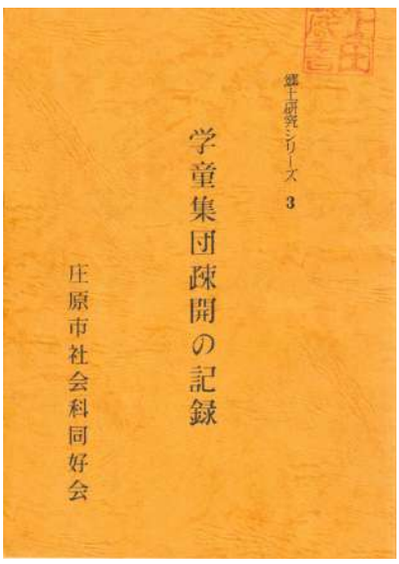
「庄原・原爆の記録 第2集」

庄原市社会科同好会

先月号の第一集の紹介で、庄原日赤に最後まで残っていた被爆軍人患者の佐々木泉さんのことを書いた。その佐々木さんが第2集に「被爆手記」を寄せている。末尾に「（S47・5・15記）」とあるので、46歳のときの手記である。

佐々木さんは大正15（1926）年10月7日生まれ、被爆当時は19歳である。昭和20年1月に徴兵検査を第一乙種に合格、同年5月広島第一一四部隊（工兵隊）に入隊する。3ヵ月の基礎教育を終えて初めて歩哨に立ったのが8月6日の午前8時、原爆投下の直前である。体が吹き飛ばされ、失くした銃を必死に探し出して自分の体を見ると、軍服が燃えていたという。





どうにかして芸備線で庄原駅までたどり着いたのが9日の午後。婦人会の人が用意していた担架で、庄原日赤の隣の庄原国民学校まで運んでもらった。「軍隊に入隊してからその日までに、こんなに暖かいもてなしを、また言葉をかけてもらったことはありませんでした」と佐々木さん。

嬉しくて家庭のことを話したのだが、同情してくれた婦人会の人が代筆して、岡山の実家に手紙を出してくれた。

両親が見舞いに来てくれたが、受付で「佐々木泉さんは、もう亡くなったでしょう」と言われたが、近くにいた婦人会の人が佐々木さんのいる部屋まで案内してくれた。患者たちはみんな同じように黒い顔をしているので、自分の息子がわからない。「この人が佐々木さんですよ」と言われても半信半疑。「お母さん来てくれたんか」という声を聞いて、ようやく我が子だとわかったという。

「学校の窓から田んぼを見ると、稲穂が出そろって、まるで天と地が私を祝福しているように思いました。」、退所時の佐々木さんの感慨である。「庄原は私の第二の故郷の気持で、一生忘れることのできないところです。」と書いている。

井伏鱒二の原爆小説「黒い雨」に、庄原日赤での闘病の手記が登場する。「広島被爆軍医予備員・岩竹博の手記」。広島第二陸軍病院教習所で被爆した岩竹は、戸板国民学校の仮収容所にいたが、患者の人数が多すぎるために庄原の陸軍病院分院（庄原日赤）に一部患者を移送するという発表があった。

「各自の体力において、庄原まで汽車に乗れる自信のある者は、手を挙げろ。戸板から庄原まで、汽車で三時間だ」

行きたいけど、病状がひどくて手を挙げられなかった者も多かったという。希望の地である庄原でも地獄がまっているのだが、愛国婦人会の存在は救いであったろう。岩竹は何度も死線をさまよい、退院後も原爆病を発症したが、どうにか恢復して社会復帰を果たしている。

第2集の庄原市峰田町、上田熊雄さんの「比婆部隊遺体収容作業の思い出」。同峰田町・六谷隆さんの「戦中あれこれ」によると、比婆部隊は比婆郡内在住の在郷軍人、青年学校生徒、未教育の補充兵で編成。在郷軍人を幹部とし、未教育補充兵や青年学校生徒の軍事教育を行い、銃後の戦力増強をはかるとともに、非常の場合は招集（短期間で一週間程度）を受けて広島市内の警備にあたるのが目的、とある。こうした報国挺身隊は各郡で編成されていたようで、「黒い雨」では神石郡と甲奴郡の混成部隊である甲神部隊のことが書かれている。

原爆投下の翌日、上田さんは招集令状を受け取る。数え歳で45歳。上田さんは原爆が

投下される2、3日前に、第一中隊（東城地区）の人と交代して広島市から帰って来たばかりだった。8日早朝に庄原に集合、列車に乗って昼頃矢賀駅に到着。広島の街は見る影もなく一面の焼け野原だった。それからは徒歩で行軍、野営地でテント泊の翌早朝から、遺体の収容・火葬等の作業が開始された。

上田さんの班は、幼年学校跡や広島城を中心とした範囲で、お城の堀の中には死体がたくさんあったという。収容の対象は軍人のみで、運ばれてきた死体を火葬するのが上田さんに割り当てられた仕事だ。屋根のない防空壕に倒れた木材を集めて積み上げ、その上に死体を載せる。倒壊したお城の木材が大量にあり、死体は40体ぐらい積み重ねて点火。同じ隊に庄原の小用町・龍福寺の住職、岡村さんがいて読経、死者を弔うことができたという。

死体処理作業は2日ぐらいで一段落したが、その後は電車道の復旧作業にまわされることになる。出動日数、約一週間。「現在、私は年をとりながらどうにか健康ですが、一緒に行った同郷の五刀吉之氏はその後原爆症で他界されましたことを付記しておきます。」と記載されている。

山内町の「原爆犠牲者之碑」。毎年8月6日には山内地区社会福祉協議会が主催する慰霊祭が行われている。東本町の宝蔵寺でも、庄原仏教会主催の追悼法要が行われている

「庄原・原爆の記録　第2集」には「郷土研究シリーズ2」という通しタイトルが命名されている。第1集が「郷土研究シリーズ1」ということか。そして、「郷土研究シリーズ3」が「学童疎開の記録」で、第2集と同時期の発行（昭和47年）である。

巻頭の「はじめに」によると、「比婆・庄原」の地へ広島市の学童たちが集団疎開してきたのは、昭和20年4月から。「この集団疎開の学童たちが、親のひざもとを離れて、本土空襲、広島の原爆、敗戦という激動の中で、どのように生きぬいてきたか、その生活記録を収集することにしました。」と出版の目的が書かれている。

昭和20年4月から7月にかけて、広島市内の国民学校児童三年生以上約一万人、引率教師約460人が、比婆、山県、双三、高田、世羅、安佐、佐伯の7郡下各町村に集団疎開を行ったほか、各自の縁故児童約1万3千人が県下各町村に疎開したという記録がある。

掛田町の長岡みよ子さんの「すいじ婦の日々」。当時は41歳で、正中院の50人余りの疎開児童の食事を担った。

「どの子も、どんぶりのような大きな皿を持って来とっての、親もとを離れて疎開していった子が、少しでもえっと食べ物がもらえるように思うて、大きな入れもんを持たしちゃったんでしょう。その中へほんのちょこっといもの茎が入っていての、とてもつらかったですよ。」

掛田の農家の人からスイカの差し入れがあったときは、我がことのように嬉しかったという。「お手を合わせて食べなさい」と引率の三村先生が言って、生徒たちがおいしそうに食べた。「おはぎもしましたよ。塩あんでの。それがなによりの大ごちそうでしたよ」。

食べ物の次に困ったのがおねしょとシラミ。おねしょは、ひどい時は一人が一晩に2回ぐらいする。空腹をまぎらわすために水ばかり飲んでいるのだから仕方がない。ふとんを洗うのが大変だった。

シラミはどうやら、一人の生徒から広がったようだ。その子は着ているものが粗末で、家族の面会もなかった。「とにかくひどかったので、全部のものににえ湯をかけて、だいぶんなおったのを覚えとるようです」。

原爆投下のことは、引率の先生と相談して、生徒達には知らせなかった。生徒たちが動揺するのを防ぐためだが、とてもかわいそうで、家族が死んだとは口にできなかったという。それでも子供達は学校の友達にそれとなく聞いていたようで、コソコソ話し合ったり、心配したりしていたようだ。

「いちばん今も心に残って離れんことは、毎朝、勝利の日まで、勝利の日までとゆうて並んで歌っていたのを、いつが勝利の日になるんじゃろうと思うてみとったことですよ。涙が出てしかたがなかったですよ。」

「郷土研究シリーズ4」の「庄原・被爆農民の証言」は、昭和48（1973）年7月30日～8月10日に、ラジオの中国放送（RCC）によって放送された内容を冊子にまとめたもの。誌面が尽きたので、またの機会に紹介したいと思っている。

社会科同好会の「郷土研究シリーズ」は、消えゆく記憶を文字で遺した貴重な労作である。原爆の光景の中に浮かび上がるのは、焼けただれた凄惨な被爆者の姿だけではない。どんなことがあっても生きたいと願う人間の逞しさである。災厄を乗り越えた人たちの体験談でもある。自然災害や海外の戦禍に怯える心に、勇気が灯った。

寄稿エッセイ

「言の葉」

高柴順紀（菊栽培農家）

田舎ではあるが『どらくろあ』は誰彼となく言の葉を紡ぐ時空となっている。だけど太古の昔は木々や草々の葉っぱは、やかましく喋っていたらしい。その様子は出雲国造が代替わりするとき大和朝廷に奏上したという出雲国造神賀詞（いずものくにのみやつこのかむよごと）の中に出ています。

「豊葦原の瑞穂の国は、昼は五月蝿なす水沸き、夜は火べなす光く神あり、石根木立 青水沫も事問ひて荒ぶる国なり」

高貴な世界ではなく下々の世界ではあるが、よく似た表現が神楽の能本にも出てきます。広島県北の神楽資料では東城町戸宇の栃木家文書が日本最古の神楽資料としてよく知られていますが、東城町森の中島家文書も江戸中期からの物が伝わっています。その中の荒神能は当然ながら記紀神話をもとにしており、ここで荒神能の台本の一部を紹介します。

東城町森 鳶屋名 荒神さん

あらすじは荒ぶる神などを鎮めるために天孫降臨したニニギノミコトの話ですが、お供の役として手力男（タチカラオ）の命と天のうずめの命が登場します。その会話の中に喋る草が出てくるのです。

一（ニニギノミコト）**何と、国中のあらぶる神　草のかき葉ハ言やめけるか**

一（手力男ノミコト）**中々の事 岩根木のたち草のかき葉ハ言止て候・・・**

昔の人々の恵まれた自然観が言の葉という世界を生んだに違いないと思っています。現代人の科学的自然観では言の葉などという発想は生まれない。例えば地球温暖化や大地震を荒ぶる神々のなせる災いだと語る人などいるだろうか。

一 それそれはやく悪神鎮の法唱え祈りて候

一 畏て候

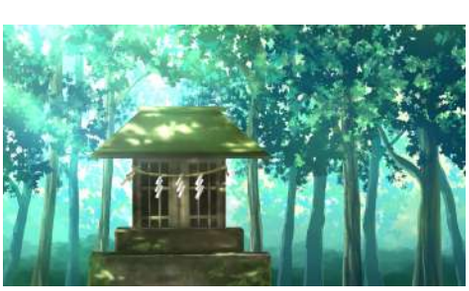
一 天清浄地清浄内外清浄六根清浄

一 ああ是ハ天竺震旦我朝三国渡り荒ふる神荒神とて眷属九億四万三千四百九拾神 或ハ山野の大木を家とし或ハ峩ヶたる岩石お宿とし諸人の悪キ心を見出し 悪鬼悪神と成て妨おなし申也 然共天神降りんの折からの祈りを掛け 信心徳達の霊神と成り申し候 今よりしてはいちがら一名の守り神となろうつるにて候

ここで名（みょう）の守り神になると約束して話は終わるのですが、荒神を東城や西城では本山三宝荒神として今も祀り続けています。最強の悪神を後ろ盾にして十軒前後で構成されている名の安寧を願い、毎年晩秋には荒神祭りを行っています。七年とか、十三年、三十三年の式年には神のお告げを直接聞く荒神神楽となりますが、大がかりゆえに今は村の衰退とともに執行は困難となり、荒神の祠も荒れつつあります。梁塵秘抄に出てくる歌そっくりです。

見るに心の澄むものは、社毀れて禰宜も無く、

祝（ホウリ）無き、野中の堂のまた破れたる、・・・



（イラストは実物でなくイメージです）

文学探訪
人生探訪の徒、倉田百三の流転⑥
国粋主義への傾斜

音谷 健郎

愛の崇高を説き、信仰への道を探った倉田百三は、晩年に国粋主義へと傾斜を強めていきます。その実践として中国、旧満州の長期旅行を試みますが、旅の疲れで病床に就き、亡くなります。私は文学者として、「愛と信仰」をもっときわめて欲しかったと思う気持が強いです。

例えば青年期、一高の学友誌に投稿した諸論文から国粋主義への兆候を探り出すことは出来ません。むしろ、「一切の社会と歴史とより与えられた価値意識を捨てよ」と、国家的なものを含め、権威への反発がうかがえます。

壮年期、『静思』など諸論文は信仰への誘いを感じますが、国家主義への兆候は感じられません。

いつの頃から、国粋主義というか、政治運動に傾斜を始めたのでしょうか。傍目にもはっきり分かるのは、昭和8年、赤松克麿、津久井龍雄らと国民協会を結成し、機関紙「国民運動」の編集に携わった頃からです。この翌々年、長編小説「祖国の娘」を刊行し、政治化した作品を次々と発表しています。

ただ、当時の日本の政治的な状況も見逃せません。昭和6年の満州事変に端を発し、翌年には満州国建国や犬養首相を銃殺した5・15事件が起こされています。どのような姿勢で政治に巻き込まれていくのかが、問われるのだと思います。

庄原小学校で歌う校歌は、「比婆山続き勝光の峯に白雪つもるとき」と始まります。小学校の校庭から北を望んだ時に見える遥かな景色です。続く「遊ぶに嬉し父母や」の語句は、おやっと思わせます。いかめしい言葉が多い校歌にしては、型破りの親しさを感じさせます。

ところが歌詞の四番は、「我等が胸は小さくとも宿るは日本の大自覚」とあり、今は歌われていません。「大自覚」という語句は、いかにも国家主義的で、現代からかけ離れているからです。この校歌は太平洋戦争の真ただ中の昭和17年、百三が依頼されて歌詞を書いたのです。少しユーモアをこめながら、国家に尽くそうとする百三の姿が浮かんできます。

百三が、その政治への参加をどれだけ突き詰めて考え、悩んだかは、次のような述懐から察することが出来ます。

「知識上、感情上のプロレタリア論客でなく、一人のローザ・ルクセンブルクが尊まれる、意志的、行為的なる彼の女が尊まれる。自分が若し知識上、感情上の宗教的生活で終る者なら、自分は何たるなさけなき存在であらう。自分は意志的、行為的なる宗教生活者とならねばならぬ。彼の女が銃床で頭を割られて死んだやうに、自分も汽車の前に飛び込み得るやうにならねばならぬ」と。これは、昭和5年に刊行の『絶対的生活』の一節です。

ローザ・ルクセンブルクとは、ドイツの有名な女性社会主義者で第一次大戦後の武装蜂起を指導し、虐殺されます。

百三はさらに続けて「『生活者』も

◆晩年の論集◆

昭和5年「絶対的生活」
昭和7年「生活と一枚の宗教」
昭和9年「大乗精神の政治的展開」
「法然と親鸞の信仰」
昭和13年「祖国への愛と認識」
昭和14年「H本主義文化宣言」
「静思」
昭和16年「共に生きる倫理」

宗藤中氏の筆

壮年の百三

単にインテリゲンチャのプロレタリア意識いぢりとなり、マルキシズム・イデオロギーの特色なき出店となるに過ぎないなら、存在の意義は無いと思ふ。プロレタリア意識に関する『生活者』の主たる使命は寧ろプロレタリア意識の生活的基盤の闡明（せんめい）に在る」

「自分はマルキシズムによって人間精神の自由と解放とを感じさせられないで却って型化と窒息とを感じさせられるところがある。その点に関する限りでは反抗せざるを得ない」と。百三が、時代の先端思想と向き合い、自分の存在意義を見失うまいと格闘している姿です。

手元に晩年の作品の『青春をいかに生きるか』と題した文庫本（角川書店、昭和28年刊）があります。幅広く人生のテーマに触れており、百三の人生観がよく分かるので少し紹介します。

「いつまでも私に『出家とその弟子』のやうな作を書けと注文するのは無理だ。私はもっと塵にまみれて真理を追ひつつある。世間にもまれ、現実を知り、ことに今日では貧苦の中に生きつつ国民運動もしてゐる。しかし一生純情と理想主義とを失ひたくない」

「宗教なき政治といふものは本来あるべからざるものである。政治はその技術から、もう一度宗教にまで還元せねばならぬ。技術は政治のしもべであって、宗教は政治の主である」

「労働したからパンを得る権利があるのではない。それだったら病人や不具者や子供はパンを得ることはできない。労働は報酬を求めずして一つの奉仕としてなされ、パンはその労働の報いではなく神がわれわれの生存を許してその生存に必要なものとして考えて下さるといふふうに考へたい」

百三の政治観、宗教観、労働観がよく分かります。単なる国家主義とは違い、ヒューマニズムと信仰と行動を調和させようとしていることが、うかがえます。

百三は、昭和14年、百三のこんな生き方を慕う若者たちを集めて「生きんとての会」を立ち上げます。多いときには一ヶ月に数回会合を持ち、青年の指導に当たりました。「大化の改新」「日本主義文化宣言」「公に奉じる心」などを説きます。だが戦後、次のような批評にさらされます。

「啓蒙主義的な宗教人の立場を選び、何故か外的な世界に幻を描くに至った」「永すぎた闘病生活が、現実の社会との闘いを許さず、社会主義的な運動での発言で時代錯誤ぶりが露呈した」などと。

戦時下の百三は、自分の理論を打ち立て、純粋で真剣です。だが“哲学青年”としての初心を生き続けた百三は、国家による思想の統制を見抜くことが出来なかったように思えてなりません。

◆政治に傾斜した晩年◆

1928(昭和3)年　関東軍、張作霖爆殺
1931(昭和6)年　成田山新勝寺で断食水行
　　満州事変勃発
1933(昭和8)年　赤松克麿、津久井龍雄らと国民協会を結成
　　機関紙「国民運動」を編集
　　この頃から、仏教と日本主義を結びつける
1935(昭和10)年　長編小説『祖国の娘』を刊行
1936(昭和11)年　2・26事件で軍部独裁へ
1936(昭和11～13)年　少女山本久子との熱い往復書簡
1938(昭和13)年　論集『祖国への愛と認識』刊行
　　新日本文化の会設立に参加、機関紙「新日本」編集長に
1939(昭和14)年　日本主義文化同盟に加入
　　「生きんとての会」創設、主宰
　　10月～12月　朝鮮、旧満州、中国など視察旅行
1940(昭和15)年　大陸の過労な旅で発病
　　自伝小説『光り合ふいのち』刊行
1942(昭和17)年　「公に奉ずる心」を口述筆記
1943(昭和18)年　東京・大森の自宅で永眠、52歳

ハロー注意報⑨
――進駐軍がいた町のはなし
川のある風景今昔

松岡 初枝

天保年間に官選した「新武蔵風土記」に「入間川の流れに八町（はっちょうの）渡しと伝るあり。その昔は川幅もいと広かりしことと思はる…」とあり、町を西から東へ流れてやがて荒川に注ぐ入間川は、その昔は暴れ川といわれ、洪水もたびたび起こった。江戸時代、上流の名栗川の上、名栗、成木あたりで育成した上質の檜や杉、称して西川材を筏に組み、名栗川、入間川、新河岸川を経て江戸まで下った。川の中には筏道と呼ばれる筏専用の通路があった。「名栗出てから千住まで中を四日の筏旅…」という川唄もあり、江戸の町まで約五日がかりだったことが分かる。普通の船旅なら二日程で着くところを、四日、五日と時を費やすのは、大切な木材をゆっくりと運ぶことが必要で、筏流しのお兄さんが、八丁渡に筏を係留して、入間川の町で最初の一泊をするのだ。そこでこの地には宿屋が多かった。帰りの陸路でもこの地に泊ってから名栗へ向かう。特に帰路は給金も入って懐があたたかいので、芸者や宿場女郎と遊び、旨い物も喰ってゆくので、芸者、女郎、料理屋も多かった。

かい掘りする子供達

江戸の町が発展し始める頃から、西川材と青梅（おうめ）の焼石灰が手に入りやすかったので、あっという間に江戸は大きな町になっていった。火事も多発し、漆喰や木材は常に不足気味、大店などは火事で焼けても直ぐに店を建てられるように、郊外に材木を買い置いたという。今でも名栗や成木の山大尽の末裔は、山や屋敷を持っている。五月の節句の鯉のぼりは、今でも特大で、往時の隆盛が偲ばれる風景が見られる。

江戸より古く、鎌倉時代になる頃、木曽義仲が京に入り、あっという間に源頼朝配下に滅ぼされた。義仲の子義高が鎌倉から逃げ、入間川原で討ち死にしたが、今も「清水冠者義高、終焉の地」に清水八幡という小さな社がある。NHKの大河ドラマの収録でロケ地になった場所だが、川を越した場所に「影かくし地蔵」があり、義高が川を渡りきれれば命が助かったかもしれないという、当時の人がこの秀でた若武者の薄命を惜しんだと思われるエピソードは涙を誘う。

入間川は狂言にもなっている。関東地方の川が多く南・北へ流れるが、入間川は西から東へ流れる。この事から、逆さ川と呼ばれ、狂言も逆さ言葉を使って作られた滑稽な大名狂言になっている。

このように古くからこの地で親しまれてきた川だが、戦争直後にジョンソン基地が置かれてからは、すっかり汚れてしまった。鮎やヤマベなどが泳ぐ清流が、基地の廃水が垂れ流されるようになってからは、アンモニア臭が漂い、淀みには汚れから発生した泡がプカプカ浮いて、夏には大量の魚が死ぬほどの川になり果ててしまった。川漁師も居る生活に欠かせない川だったのに、子供の川遊びも禁止された。町が改善を求めてもノラリクラリ。昭和二十九年に狭山市が発足してから、少しづつではあるが水質が良くなっていった。

「川へ行くんなら田島堰の上（かみ）にしなよ。下（しも）は便所水なんだよ！」「はーい、泳がないからさ、皆でかい掘りするだけ…」「だから田島堰の上で遊ぶんだよ！」。どこの家でも夏休みの川遊びは神経質になっ

ていて、基地の廃水が流れ込む水には入るな、と子供達に命じていた。基地の好意らしい配慮?で、川原にブルトーザーで掘ったプールらしい遊び場ができたが、誰もそんなプールで泳ぐ者は無かった。子供は自由にせせらぎに居る小魚を追ったり、石の下に居る川虫や小さい川エビを採集したいから、にわか造りの大きい水溜まりなんか見向きもしないという訳だ。

春休み、まだうすら寒い三月の朝、祖父が嬉しそうに言った。「はっちゃん、もっちゃんもくんちゃんも長靴履いて！　川へ行くよー」、「あっお爺ちゃん、鮎が来るの?」、「そうさ、今朝、琵琶湖から来るからさ。もう川へ着く頃さ。早く網とバケツ持って行くよー」。祖父の趣味である鮎釣りの鮎の稚魚放流の日は、毎年春先に入間川で行われる。鮎釣り仲間で作った「鮎友会」という同好会で、琵琶湖で生まれた稚魚を買いつけ、かなりの量を放流する。川漁師や釣道具屋のおじさん達と権利を決めて鑑札を発行し、稚魚を買う費用にする。

鮎漁で魚を網に追い込む

台風のあとの仮り橋

田島堰より川上はまだ清流なので、鮎が育つには充分な石もある。川へ着くと放流が始まるところで、トラックの荷台の大きなタンクから沢山の稚魚が川へ放たれる。五センチ足らずの小さな鮎が一斉に泳ぎだすが、中には死んだり瀕死の稚魚もいる。川底に多くの小鮎が沈んでいるのを網で掬う。すぐにバケツはいっぱいになる。「爺ちゃん、こんなに死んじゃったんだ…」下の弟が悲しそうに言った。「ひと晩トラックに揺られていたから弱いのは死んじゃうんだよ」。「今夜は天ぷらだね」と私が言うと、祖父もニコニコ顔で「これは爺ちゃんの役得さ。買いつけから放流の手配までやったからネ」。家族皆、この稚魚のかき揚げが大好物なのだ。ついさっきまでピンピンしていた香りよい稚魚が、その晩の夕飯の主役となる。夏になって釣った成魚とは違った、繊細な味と香りのかき揚げは、今思い出しても最高の御馳走だった。

鮎友会は、夏になると“鮎漁”も行う。川漁師が大きな網で魚を追い込み、その中に入った魚を塩焼きや天ぷらにする。川にテントを張り、料理屋のおじさん達が調理してくれる。大人は酒やビール、子供はジュースで、年に一度の贅沢な宴となる。「戦前はもう少し下流で鮎漁ができたのになあ…」「そうだったなあ…、もっと広い川原の場所だったもんさ」。祖父や鮎友会のOさん達の愚痴も肴に、川風に吹かれながらの鮎漁は、忘れられない風物詩だった。

川はその時々で見せる顔が異なり、私が子供の頃は、大きな台風が来ると木造の橋が流され、しばらくは仮橋を使ったりしたが、その後は立派な鉄筋コンクリートの橋が作られた。車の数も増え、橋は重要なインフラとなった。後年できた工業団地が、トラックでの輸送を必要とするようになったために、今では狭山市内だけでも入間川に架かる橋は七つになった。それでも朝夕は混雑する。母は「私なんか、どこまでも泳いだもんさ。のどかだったねえ」。よき時代への思い出は尽きない。

米軍と自衛隊が入れ替わり、川も様変わりした。最近この地に住むようになった人達は、この入間川の昔の風情などは、知る由もないと思う。

ウランガラス

――現代御伽草子㊹

亜木冬彦（あきふゆひこ）

※県北の歴史や風物を題材としたフィクションです。

「これはひどいな」

墓所に生い茂る草を見て、思わずつぶやいた。

「一年ぶりだからな。おまえが来てくれて助かったよ」

鎌を手渡されてげんなりした。刃が錆びだらけなので、瓦のかけらを拾ってきて、水に浸して刃先を研いだ。雑草は手で引き抜けるが、笹の葉は茎が丈夫で鎌を使わないと断ち切れない。ユーカリの葉を燻す煙が漂っている。岡村が子供の頃には、蚊取り線香ではなく、蚊やりにユーカリの葉が使われていたという。秋の虫が鳴いている。鈴虫だろうか。

「古い墓石が多いな」

「岡村家の墓」と刻まれた累代墓の背後には、様々な形の墓石が並んでいた。苔むした石を積み上げただけのようなものから、笠石のある立派な墓石まで多様である。

「本当かどうかは知らんが、爺ちゃんは酒に酔うと、うちの先祖は平家の武士だったと言ってたよ」

苦笑を浮かべて頷いた。この地には、「敦盛さん」という民謡が伝承されている。平敦盛は平清盛の弟、経盛の末子。若干十七歳で源平の一の谷の合戦に参加、源氏の侍・熊谷次郎直実に討ち取られた。敦盛は絶世の美少年と言われ、この「平家物語」の名場面は、能や幸若舞、文楽や歌舞伎の題材になっている。

敦盛の室である玉織姫が、敦盛がまだ生きているという言い伝えを頼りに各地を巡り歩き、永江の里（庄原）に至り隠棲した。「敦盛さん」は、玉織姫が敦盛を想い、平家の再興を待ちわびる姿を唄ったものだ。

「そういえば、お前にえらい美人の叔母さんがいたよな」

「カオル叔母さんのことか？　どうして知ってるんだ？」

「高校の時に、お前の弁当を届けに来たことがある。ジーパンに革ジャンでバイクにまたがって、格好良かったな」

半世紀近くも前の光景が鮮やかによみがえった。

「あの格好で市役所に通っていたからな。風（ふう）が悪いから車にしてくれと親父がいくら言っても、聞く耳をもたなかった。さすがに定年退職してからは、原付のスクーターに替えたけどな」

「今はどちらに？」

「病気で亡くなったよ。まだ六十代だった……」

遠い目をして言った。

大まかな草取りが終って、岡村が花を活けている間に、わたしが蚊やりの炎で線香を焼いた。並んで合掌しているときに、瞑目した瞼に、ヘルメットを脱いで長い髪の毛をかきあげたときの涼やかな笑顔が浮かんだ。

本棚を見せられたときはため息をついた。函入りの百科事典がずらりと並んでいる。大判で豪華な装丁の美術全集、世界文学全集、日本文学全集等々。嵩ばって重く、たくさん残っているので値段が安く、ほとんど売れない。古本屋の三重苦が揃っている。

「おれが古本屋を始めた頃に、古本を売りたいから来てくれと依頼があった。おばあさんの一人暮らしの家で、こんな立派な本が並んでいた。正直、タダでもほしくない本だが、仕方なく千五百円の値をつけた。おばあさんの顔がみるみる険しくなった。おれは悪徳業者だと恨まれて、本を半分以上、処分場に運んで損をした」

岡村が唖然とした顔でわたしを見た。そして、苦笑を浮かべて頷いた。

「古くて傷んだ本は処分して、きれいな本だけ残したんだがな」

たぶん、その処分した方に値段の付く本があったはずだ。

「しかし、お前が古本屋のおやじになっていて驚いたよ。こんな田舎で店を開いて商売になるのか？」

「ぼちぼちだな。それに、人の多い街中だと、店を開いていないし、やってもいけないだろうな」

岡村が深く頷いた。

「客商売に向いているとは思えないものな」

「その通り。暇な古本屋で満足しているよ」

実家の古本を処分したいから見てくれと岡村から頼まれた。何年か前に両親が施設に入って、今は空き家になっている。

「このあたりの本はいい感じだな。読み手のセンスを感じるよ」

芥川賞全集に岡本かの子全集、安岡章太郎や吉行淳之介、庄野潤三、遠藤周作などの「第三の新人」の単行本が多く並んでいる。第三の新人とは、日本において昭和二十八年から昭和三十年頃にかけて文壇に登場した新人小説家たちの総称で、第一次戦後派作家、第二次戦後派作家に続く世代としてそう呼ばれた。

「カオル叔母さんの蔵書だよ」

妙に納得してしまった。

「お前の叔母さん、何か書いていなかったか？」

蔵書の中に、角川書店の「類語辞典」を見つけた。

「一度、原稿用紙を燃やしているのを見たことがある。書いていたとしても、残ってはいないだろうな。そうだ、アンティークのガラスの食器を集めていたのが遺っている。見てくれるか？」

アンティークの骨董は門外漢だが、見たいと思った。

「よく旅行で海外に行ってたんだが、そのときに買ってたみたいだな」

水差し、グラス、花瓶、香水入れ……、段ボール箱の中から繊細なデザインのガラス細工が出てきた。

「これはひょっとして……」

肉厚のガラスが淡い緑色を帯びている。

「叔母さん、卓上スタンドなんか使ってなかったか？」

そういえばと岡村が立ち去って、相当に古びた卓上スタンドを持って来た。蛍光管が青紫色をしている。卓上スタンドの電灯が点くのを確認してから、部屋の電気を消した。

「これは……」

岡村が驚きの声を上げた。ガラスの食器が緑色の蛍光を発して輝いている。

「やはり、ウランガラスだ」

「ウランが入ってるのか？」

「着色剤として、微量のウランを混ぜている。ブラックライト……、紫外線ライトのことなんだが、それを当てるとこんなに光るんだ」

「放射能は大丈夫なのか？」

「微量のウランで、人体には影響がないと言われている。日本でも、今でも製造している所があるようだな」

「しかし、どうしてこんなものを……」

岡村が考え込んだ。

「カオル叔母は、子供の頃、広島の親戚の家にいて被爆している。原爆症でしばらく療養していた時期もあるんだ。たぶん、それが原因で結婚の約束をしていた恋人とも別れた。そんなにひどい目に遭っているのに……」

わかるような気がした。しかし、それを口にするのが不遜な気がして、ウランガラスの妖しい輝きを見つめていた。

まちの古本屋さん
どら書房
古書探索の旅に、お気軽にお立ち寄りください。

・無料本、百円本、50 円本などのコーナー。
無料の漫画ルームもあります。
・地元のポストカード、新鮮野菜の店頭無人販売もやっています。
※九日市の開催日は定休日でも開店します。

●庄原市中本町 2-1-10　●定休日：毎週月・火曜日（2月は店内整理で全休）
●TEL: 090(9913)3052　●営業時間 9:30 ～ 18:30
※広島銀行庄原支店の手前（三次側から）※交差点角のまちなか駐車場が使用できます。

特別連載㊱

「旧暦」のカレンダーを見る

古川 行洋

第三部　生活に身近な項目を見る

十二月一日　暦配り

旧暦時代は、十二月一日から来年のカレンダーの販売配布が開始された。

十二月八日　針供養

折れた針を供養し、裁縫の上達を願う行事。

関東では一般に二月八日に行うが、十二月八日に行う地方もある。この両日とも、事八日（事始め・事納め）にあたっており、昔からさまざまな行事が行われてきたが、それが江戸など大都市では針供養に変わっていったようである。

針供養は、明治中期まで盛んに行われていたが、現代では家庭での針仕事は全くと言ってよいほど行われなくなり、この行事は聞かなくなった。洋裁学校関係者だけの行事となってしまった観がある。

針供養は、江戸時代初期に始まったといわれる。民間の女性たちの間で年中行事となっており、この日は針仕事を休んで、折れた針を淡島様に供え、裁縫の上達を祈った。淡島様は、和歌山県海草郡加太町淡島神社の祭神が婆利才女とするところから、各地にある淡島で針供養を行った。地方によっては、折れた針を集めて、豆腐やこんにゃくに刺して川に流したり、紙に包んで海に流したりした。

また、この行事はほぼ全国に行きわたり、さらにこの十二月の八日に対立した新暦の二月八日にも、針供養をするところが関東・東北・九州南部で行われている。

十二月八日　師走の八日（ようか）吹き

東北や山陰地方、また飛騨の白川村などの、海辺も山奥も一様に、旧暦十二月八日の針供養の日に、根拠はないが、吹雪があるといわれている。この日は針供養の日であるから、日頃から折れた針はためておいて、この日に川に流し、縫い物をする。女の子の集まる所などでは、焼いた餅を供えて小さな祭りをした。

十二月十三日　煤（すす）払い

年末・正月を迎えるにあたって、家の内外を大掃除する行事。煤払いは、もともとは年神（としがみ、正月に家々で祭る神）を祭る準備のための宗教的な行事であって、単なる清掃とは意味が違っていた。つまり正月事始め、神祭りの始め、物忌みの始めが十三日の煤払いであった。

江戸時代、徳川幕府は十二月十三日を江戸城御煤納めの日と定めていた。江戸城内では奥女中らが神棚や城内を清掃し、煤払いを行ったという。江戸市民もお上にならって、この日に煤払いをするようになった。商家では大掃除が終わると、主人の胴上げが行われ、祝宴を上げたという。

十三日に煤払いを済ませると、正月までには日がありすぎるため、この日には神棚と仏壇の清掃のみ行い、家の内外の大掃除はそれ以降の適当な日に行うようになった。やがて、これが暮れの大掃除という形になっていった。

十二月二十八日　御用仕舞い

御用納めで、官公庁では、十二月二十八日でその年の事務を終わりとする。残務を始末し、整理整頓など簡単な業務を済ませた後、事務所を閉める。この翌日から、一月二日までが、お休みとなる。

一般会社では、仕事の都合によって、三十日や三十一日に御用納めをするところがある。

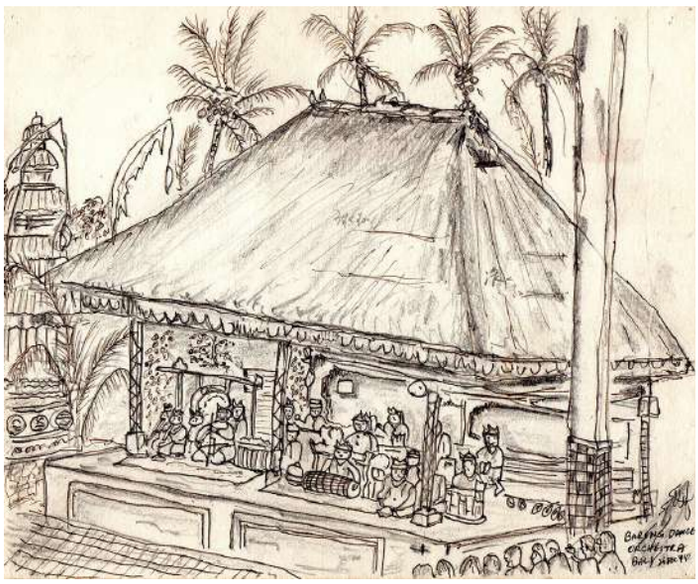
（著者は広島市安佐地区の郷土史研究会「安佐通史会」会長。旧暦の啓蒙や「旧暦カレンダー」の普及に尽力している。）

海外ツアー添乗員日誌⑥

バリ舞踊「バロン」

マック☆ヤマザキ

世界的な観光地、インドネシアのバリ島。この島では地元のお祭り、観光客向けのステージなど様々な場面で「ガムラン」という伝統音楽が、寄棟づくりの劇場の屋根の下で奏でられている。奏者たちの動きや様々な楽器に興味を持ち、スケッチした。



演奏する人たちは「ウダン」という鉢巻状の布を頭に被っていて、楽団員が一つにまとまってみえた。演奏に合わせてバリ舞踊（ダンス）が始まると、舞踊家の頭、首、目、手、指先、腰の動きがまるで人形のように動く。ダンサーをスケッチするのは難しいと思ったので、奏者の方を選んだという理由もある。

胡坐（あぐら）の上に乗せた両面太鼓は、牛皮が張られていて「クンダン」と称されている。片方の手には太鼓を打ち鳴らす棒、もう片方は素手でたたきながらリズムを刻む。緩急のテンポでダンサーと交信し、他の奏者に合図を送る。奏者全体を仕切っているので、まるで楽団の指揮者であるコンサート・マスターのようであった。

「ガムラン」には楽譜がなく、棒を振る指揮者もいないため、曲を始めたり、盛り上げたり、静めたり、終わらせたりするときには特定の楽器からの「音のメッセージ」が合図となるという。大抵の場合、それは前述の「クンダン」の奏者が受け持つ。「クンダン」と他の楽器との音のメッセージのやり取りで、一つの曲が様々なバリエーションに展開してゆく。更にそれに踊りが加わると、踊り手の“振り”の合図によっても音楽全体が変化するらしい。

もう一つ大切な楽器が「ゴング」という大きな銅鑼（どら）で、曲の節目となるところで打ち鳴らされる。ほかにも日本でも親しみのある楽器、「胡弓」、「笙（しょう）」、「木琴」、「鉄琴」が見受けられ、スケッチしていても親しみが感じられた。

バリ舞踊「バロン」とはバリ島に伝わる獅子の姿の聖獣のことで、日本のしし舞いに似ている。頭の部分を担当する人と、肩の部分から尻尾の部分を担当する人に分かれているので動きが激しく、とても刺激的である。獅子は目がまん丸く大きいのでなんとなく愛嬌があり、舞踊家（ダンサー）の目の形の化粧とも共通しているように感じられた。

口を開け閉めするたびに「カチッ！カチッ！」と歯切れのよい音を発して観客の注目を浴びていた。この獅子、バリ島では善い魂と邪の魂の両方が同時に存在していると考えられていて、善の象徴であるバロンと邪の象徴である魔女ランダの終わりなき戦いを描いたバリダンスの代表的な舞踊なのである。

バリ舞踊がユネスコの世界無形文化遺産に登録されていることは先月号に書いたが、日本でも「能楽」「人形浄瑠璃文楽」「歌舞伎」が２００８年に登録されている。

どらくろ俳壇＆歌壇

※参加を歓迎します。

すぐ消える花火を川の水鏡　近藤 昌平

満天や星の王子と薔薇一輪　冨久 光

施設へも音の届くや遠花火　片岡 正人

野良に出てふと見上げたる雲の峰　隆愚

踊り場に昼休みする青大将　大槇 三代子

一瞬の輝き残し花火かな　寺内 龍二

独唱也（なり）骸となりし油蝉　赤川 冬人

涙あり輝く汗もある五輪
今も戦禍に散る命もあり　松岡 初枝

投稿＆寄稿

候のことば
「禾乃登」

隆愚

暦の上で、二十四節気七十二候の「処暑・末候」は、新暦では九月二日から九月六日頃で「禾乃登」（こくものすなわちみのる）の候といいます。

いよいよ稲が実る頃です。「芒種」の時は、穂先の毛を現わす「芒」を「のぎ」と読みますが、稲が実る頃の穂先に生えている毛も「禾」（のぎ）といいます。「禾」の字は、もともと穂をたらした稲の姿を描いた象形文字だったそうです。稲や麦、粟などの穀物の総称でもあります。

「登」には実るという意味もあります。「実るほど頭（こうべ）を垂れる稲穂かな」という諺があります。謙虚に穂を垂らしている稲穂を教訓としながら、人もまたおごることなく、感謝の気持ちで見つめてきたのでしょう。

ちなみに、稲は縄文時代には日本に伝わっていたとか。ごはんとして炊くものは、うるち米、餅にするのはもち米です。うるち米はもち米より粘り気が少なく、うるち玄米は半透明の飴色をしていますが、もち玄米は不透明な乳白色です。

稲垂りぬ幾千万も露を抱き　小野房子

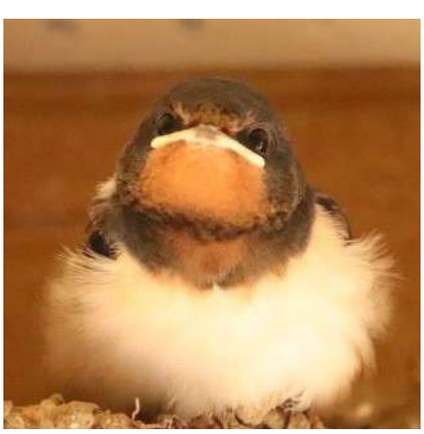
「ひとりっ子」

赤川 仁洋

連日の酷暑で、過疎地の商店街は人通りが途絶えている。ラジオでは天気予報の後で「不要不急の外出は控えて、エアコンの効いた室内でお過ごしください」と毎回のアナウンス。二八（にっぱち）、寒い二月と暑い八月は鬼門、商売のセオリー通りだ。

店頭のシャッターの上のツバメの巣に、二回目の雛が誕生した。前回、五羽が巣立ったことを報告したが、たぶん違うつがいの子。しかも雛は一羽だけ。時期が遅れている上にこの暑さである。渡りの時まで時間がないので、一羽だけでも早く育てようという意図か。自然界は合理的である。両親の餌を独占して、雛はどんどん大きくなった。

そして、今夜は庄原の「よいとこ祭り」。雛は大丈夫だろうか、と心配しながらも、巣の下に提灯を掲げて準備した。大音響のパフォーマンスに観客の声援、人混み。九時頃まで続いたパレードもようやく終了。雛は巣の上の鉄線にとまって、身を固くしている。提灯をしまい消灯すると、さえずる聲が聞こえてきた。寄り添う親鳥たちのシルエット。「ひとりで怖かったよー」「よく頑張ったね」「もう大丈夫」。話し声が理解できた。



どらくろあ 掲示板

地域のイベント情報やメンバー募集など
情報掲示板です。

どらくろあ ホームページ

バックナンバーも掲載しているので、ダウンロードしてお楽しみいただけます。

http://shobara.wix.com/dorakuroa

「庄原を想う会」主催の交流会

「気軽に庄原について話し、仲間の輪を広げよう」

日時：10月5日（土）9：30～11：30
テーマ：「地域資源を活用した
　　庄原の活性化について」
講師：柳井妙子
場所：生活交流館1（備後庄原駅隣接）
参加費：500円
　　（学生200円、お茶菓子代込み）
申込み＆問合せ：080-3631-9125（やない）

「第52回・水庄会」開催

会期：令和6年9月12日(木)～9月15日(日)
　　10時～18時(最終日は16時迄)
会場：庄原市自治振興センター多目的ホール
　　庄原市西本町2-17-15（0824-72-3777）
主催：水庄会(日本水彩画会広島県備北支部)

〈出品予定者〉

青木照和　市川美南子　碓井節子　音谷健郎
柿内文子　河面浩子　坂本義明　滝打千一
竹岡敦子　竹原朝美　堤和之　戸井妙子
中村勝　橋本みゆき　林安奈　日高久子
福田善子　藤原玉江　藤原三枝　本田則子
安好芳子　山下徳三　若林節美

「ぐんぐん伸びよう会」

（教室：庄原市川西町241　連絡先：080-3631-9125　やないたえこ）

黒板のない教室

当教室の特徴

- 乳幼児～小学生を対象に、能力開発として個々の生徒の「可能性」を追求する。
- 母国語である国語を重点的に行うことで、脳を活性化させて、思考の土台作りを行う。
- 算数・数学の基礎である数感覚を身に付けることで、小学6年生までに必要な四則混合を得意にさせる。
- 年2回（夏・冬）に暗唱音読会を実施することで、生徒の記憶する能力を高め、自信を養わせる。

無料体験学習受付中！！　お気軽に問い合わせてくださいね。　対象者：0歳～小学6年生

編集後記

◇パリ・オリンピック、日本は大健闘！　サッカーや野球等でも、日本人選手の活躍が目立っています。食事やトレーニング方法が確立されて、体力負けしなくなったので、日本人の器用さや勤勉さが活きてくる……。テレビが壊れたままなのでラジオ観戦、やはり物足りないですね（苦笑）。

◇酷暑続きで早々に夏バテして、気が付けば2ヵ月近く自宅の近辺でくすぶっていました。来月号からは「木次線ストロール」も再開予定で、ローカル線の旅を楽しんできます。

◇カープとサンフレッチェ、いよいよ“秋本番”ですね。ドラゴンフライズに続いてトリプル優勝を！

発行：どら書房
〒727-0012
庄原市中本町2-1-10
☎090(9913)3052(赤川)
e-mail:touzin@nifty.com

誌面デザイン：ROUTE183
協賛：九日市愛好会

第276回　　くんちいち

しょうばら九日市

◇ イベント情報 ◇

九日市ライブ③★今回の出演は堀内トミオさん（エド・シーランを敬愛する比和町在住のシンガー）、日本の名曲にも挑戦する予定です。

★出演者募集中！参加申込フォームか comeme 商会 公式 Instagram の DM から申込みを。

参加申込フォーム：https://forms.gle/TCcDob1YS8GdSn766 Instagram：https://www.instagram.com/comemeshokai/

TOPICS（開催場所は裏面の地図参照）

★市民ギャラリー「アート多愛夢」
9月7日(土)～9日(月)10～16時(9日は9～15時)
「花（87才）展」（森原多美子水彩画展）

★HONMACHI STAND→コーヒー100円引き
★カフェクラウド　タピオカドリンク100円引き
九日市特製ビタサンド600円

★庄原特別支援学校・木工＆加工食品販売（楽笑座）

★利き酒・試飲イベント「さけくらべ」（庄原酒販）場所：旧松本額縁店
ガレージセール「comeme 市場」同時開催＆高野名産のアップルパイも販売！

★アンドカフェ（比婆医院隣接）、2種類のスムージーが100円引き。
★どら書房、休憩室（漫画ルーム）あります！　冷房あり、無料です。

★あなたも自分のお店を出してみませんか？（出店者募集中！）

＊出店申込みは、【毎月２０日締切】　コンパネ１枚スペース１，２００円～
九日市愛好会事務局　TEL/FAX（０８２４）７２－８２８５
〒７２７－００１３　庄原市西本町２－１－１０（楽笑座内）

【ホームページ】
http:www.kunchi-ichi.jp